

神奈川県域における葬送儀礼の 変化と持続について

大和市深見の事例を中心に

Transition and Continuity in Funeral Rites in Kanagawa Prefecture :
A Case Study of Fukami in Yamato City
SUZUKI Michihiro

鈴木通大

問題の所在—はじめに

伝統的な地域社会では都市化などの影響で、生業、年中行事・通過儀礼（人の一生）などの「民俗」が変化・消滅してきたといえよう。元来、民俗事象は時間・空間の中で持続・変化・消滅・生成の行動を繰り返してきたのかもしれない。本稿で取り上げる葬送儀礼も昭和 30 年代までは持続していたが、昭和末期から平成初期にかけて、変化の兆候が顕著となり、とくに平成 20 年代になると葬送儀礼が大きく変化したといえよう。このことについては近年の葬送儀礼に関する研究からもうかがえ、研究成果は民俗学の分野だけにとどまらず、文化人類学・宗教学・社会学などの隣接分野までに及んでいるが、これらの先行研究については後述する。

本稿では、伝統的な社会における葬送儀礼について、「持続」と「変化」に照射して、具体的な様相をとらえることにある。すなわち、一体、何が変化し、何が持続（存続）し、その要因は何なのか、をとらえることにある。そのために、基軸となるモデルとなる地域社会を設定し、昭和 30 年代と平成 20 年代の葬送儀礼（習俗）のモノグラフを作成し、それらの資料を比較検討することによって、持続と変化の態様を明らかにする。また、たとえば儀礼の変化だけではなく、葬具（葬式道具）などをはじめ、いろいろな場面にみられる「小さな」変化の様相についても注意したい。なお、具体的な内容については本稿の中で順を追って後述する。

そこで、調査地として昭和 30 年代まで専業農家であったが、現在はその大部分が兼業農家になっても、家並みなどは当時の景観を残している神奈川県大和市深見地域を選定し、この地域をモデルとして昭和 30 年代の葬送儀礼と平成 20 年代の葬送儀礼（葬式）の比較研究を行なうため、葬送儀礼の民俗調査および追跡調査を実施した。さらに、大和市域における葬送儀礼の「変化」の様相を具体的に把握するために隣接地域における葬送儀礼の事例を用いて補足している。

1. 先行研究にみる葬送儀礼の変化について

先行研究では従来の葬送儀礼研究の中から、とくに「葬送儀礼の変化」に照射した研究を中心に⁽¹⁾取り上げていく。

最初に、日本民俗学では民俗の「変化」の概念についてどのようにとらえられてきたのであろうか。この点についてはすでにその流れを的確にまとめた加藤隆志の先行研究⁽²⁾があるが、「変化」についてみていこう。その前に、日本民俗学では「変化」について、どのようにとらえていたのだろうか。その辺りの状況を岩本通弥が的確に摘出している。岩本によると「柳田没後の戦後民俗学は、方法ではなく、資料としての確実性を高めること、すなわち民俗資料という対象から学の科学化を図ったが、民俗学は何も「民俗」を研究対象にするから民俗学なのではない。「民俗」の対象化とその究明の目的化は、これを変化しにくい地域の伝統であるかのように捉え、かつ個別「民俗」の発生と起源を究明するだけで、その後の変化には関心を示さない、文書のみを用いた「民俗」学をも生み出した」（傍線は筆者）〔岩本，2003，p.3〕と指摘しており、この点は民俗の「変化」を考える上で重要な指標ではなかろうか。民俗学では、民俗が変化しにくいものであるかのようにとらえ、いわゆる民俗の「変化」について関心を示してこなかったようである。

この点をもう少しとらえるため、成城大学民俗学研究所で実施した「山村生活 50 年—その文化変容の研究」と題する共同研究の成果をみよう。まず、田中宣一によれば民俗とは「変化しないもの」と「変化のしにくい文化」であるという基本理解を持ちつつ、日本の民俗学では「変化」種々相や「変遷」に関心をもちつづけてきたとしている。それゆえ、「変化」の問題に関わってきたといい、そこには眼前の変化にさほど関心を示さない態度と、眼前の変化そのものを積極的に扱おうとする態度がみられ、前者は現行民俗にいたるまでの変遷・変化の段階を追うことが目的である民俗の歴史研究もしくは変遷史研究であり、後者は眼前のさまざまな変化の実態をまず直視していると解説している〔田中，1990a〕。

一方で、森岡清美は、変化の要因としては、昭和 20 年代の法制的改革による変化、30 年代以降の技術革新と経済成長による著しい変化、40 年代以降の情報化・高齢化・国際化に伴う変化があることを紹介し、この変化の実態をとらえて、その動的プロセスを明らかにするとともに、変化の要因をえぐり出すことが社会科学の諸領域で行われてきたと指摘している⁽⁴⁾。これに対して、大本憲夫は「旧来、日本民俗学においては、かつて調査が行われた地域社会を、その後の変化を視点に再調査し、当該社会における民俗の変化の様相と、民俗のもつ意味を考察する動きはほとんど行われてこなかった」〔大本，1990，p.11〕と指摘する。

これらを踏まえて、葬送儀礼（葬送習俗）における「変化」の研究にしぼって続けよう。小松清によると、土葬から火葬という葬法の変化がみられない地域と、土葬から火葬への大きな変化がみられる地域があり、そこには変化の要因として火葬場の設置と墓地使用者間の取り決めがうかがえるとしている。また土葬が持続している場合には、火葬場が遠いという距離、火葬に伴う諸費用が負担になること、従来の埋葬地が広いこと、火葬が嫌だという精神的なことなどをあげている〔小松，1990〕。田中宣一も、葬送儀礼で最も大きく変化したのは、土葬から火葬へ移行したことで墓制に関することであるとし、山村調査から、その半分以上が火葬に転じており、しかも葬儀屋の関与が始まり、墓制では納骨堂が増えつつあることを指摘している〔田中，1990b〕。また、小田嶋政子は火葬という新しい習慣が取り入れられることによって、伝統的な相互扶助体制による葬送儀礼の維持が困難となって葬儀屋へ委ねられていく変化について指摘している〔小田嶋，1997〕。

このように土葬から火葬への移行がひとつの要因となって葬送儀礼が変化している様相をみるこ

とができる。たとえば、2013年の「東日本大震災」が契機となって、全国的に土葬から火葬への移行がさらに定着化したようである。その点を裏づけるように、昭和40年代に筆者が葬送の民俗調査していた頃には、各地の伝統的地域社会でも、話者が「火葬は熱いので、土葬でなければいやだ」といって火葬は忌避されていた。しかも、現在では「土葬は汚いからいやだ」とか、「土葬では可哀そうだ」などといわれ、土葬を忌避する声が聞かれるようになったことである。⁽⁵⁾このことは、小松が土葬が持続している要因として指摘した根拠と考え合わせると興味深い。

ところで、葬送儀礼の「変化」に注目した論考では、直江広治が葬式の変遷過程についてまとめた研究〔直江、1979〕が嚆矢といえるであろう。直江によれば、葬式に対するタブー（禁忌）が明治時代以降、急激に消滅していったことによって、葬式が大きく変化していく要因となっていたと指摘している。

今までの葬送儀礼の研究はどちらかといえば伝統的な地域社会（農村・漁村・山村）を対象にして調査報告書の多く、変化に重点的に視点をあてた研究がきわめて少なかった。近年は、社会変動の中、昭和30年代に見られた伝統的な葬送習俗の多くは変化したり、あるいは消滅したりする状況下で、新しい葬式の様式が顕著に見られるようになってきた。

しかし、この状況に対して関心は持たれてきたが、かならずしも本格的な調査研究が行なわれてきたとはいえなかった。そのターニングポイントとなったのが、国立歴史民俗博物館によって、全国を対象とした葬送儀礼（葬式）調査の実施である。⁽⁶⁾

この調査では、まず全国都道府県の47地点を対象にして一斉に実施したこと、つぎに共通の調査項目を設定したこと、さらに調査時と昭和30年代との詳細なモノグラフを作成したことに大きな意義がある。できるならば、葬式の「変化」について動態的な把握をするために、調査地を定点として、定期的な追跡調査の実施が今後必要であろう。

この調査プロジェクトを牽引した新谷尚紀が中心となってまとめた『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』⁽⁷⁾には、その成果として興味深い論考が紹介されている。なかでも、葬送儀礼の変化について、福澤昭司は葬儀社（葬祭業者）の進出と葬儀の変容について農村部・市街地・団地における葬式の手伝いの視点から論及している〔福澤、2002〕。また、関沢まゆみは、「一人の死者を送る葬送儀礼は、伝統的にその死者にとって三種類の立場の人々によって執り行われてきた。死者の家族や親族などの血縁的関係者、葬式組や講中などと呼ばれる近隣の地縁的関係者、そして僧侶など葬儀の職能者である」〔関沢、2002, p.201〕と、1960年代と1990年代における葬送儀礼の担い手の変化を三者間で具体的にとらえている。⁽⁸⁾また、公営火葬場の利用に伴い、伝統的な野辺送りの習俗が省略化されたことや混み合う火葬場の時間配分で遺体いわゆる「生仏」の葬儀から焼骨であるいわゆる「焼仏」での葬儀に変ってきたという。さらに、福澤と同様に家での葬儀から葬祭場の利用をする葬儀が増えており、この動きが今後増加する傾向を指摘している〔関沢、2002〕。

葬祭業者と葬送儀礼の関係に注目している山田慎也は「現在、葬祭業者を利用せずに葬式を出すことはほとんどないであろう。葬祭業者はじっさいに葬儀を請け負って作業するだけでなく、何をどのように、またなぜするのかという葬儀の方式や意味づけなどを提供するようになってきた。死を処理するための専門家として、葬祭業者の担う役割は日々大きなものとなっている」〔山田、2007, p.150〕と言及している。続けて、山田は葬祭業者が葬儀に全面的にかかわるようになったの

は高度経済成長期以後のことであると指摘している。山田は葬送儀礼研究に葬送の「消費文化」化の視点から、葬儀社すなわち葬祭業者の存在を取り入れて、新しい葬送儀礼研究を展開している。

葬送儀礼の変化に影響をもたらしている社会変動様などに留意した内藤理恵子の成果がある。内藤は少子化・未婚化・都市化という社会変化、宗教意識の変容、葬儀の消費文化化という視点から、葬送に「変化」をもたらす要因を抽出分析している〔内藤、2013〕。

さらに、最近の葬式・葬儀で注目を浴びているのが霊柩車の変化についてであるが、この霊柩車に照射した井上章一の興味深い研究がある。井上によれば、霊柩車とは葬儀・告別式の会場から火葬場まで遺体をおさめた霊柩を運ぶ自動車の総称のことで、この霊柩車の普及がトモライ（葬式）のありかた、とりわけ葬送の手続きをいちじるしく変えてしまったと指摘している⁽⁹⁾。

いずれにしても、現在の葬式に目を向けてみると、死を迎える場所としては家ではなく、病院で迎えることが一般的となり、これに呼応するかのように葬式が営まれる場所も自宅から専用の式場である葬祭場へとようになってきている。たしかに、葬式じたいは自宅で営まれるのではなく、どちらかといえば、葬祭場（ホール）という施設を併設した場所で行なわれるようになってきた。そこには、葬式が伝統的な互助組織であった葬式組から葬儀業者（葬儀社）に次第に変わってきている。

さて、この葬式（葬送儀礼、葬送習俗、葬儀）という用語や民俗語彙のオソウシキ（葬式）は、オトムライ、トムライ、トモライ、ソウレイ、オクヤミ、ジャボン、タチバ、ノオクリ、ミカクシなどの呼称・名称が各地域でみられる。柳田國男はオトムライについて「葬制沿革史料」の中で、「東京などのオトムライという語は、よく考えてみるとやはり一種の忌詞らしい。トモラウというのは葬後の供養のことなのだが、今は是を行列とも、又葬式の全部とも解しているのである」〔1963, p.524〕と述べている。さらに、東京のトモライに近い名称は隣接地域にはあまりなく、遠く離れた鹿児島県下甕島の一隅に、トイオクリという名があることを早い時期にあったことも指摘している。

このことから、オトムライという言葉が、本来、忌み言葉であったのが、やがて葬式などを意味する言葉となって定着していったことがうかがえる。たとえば、神奈川県大和市域ではかつては葬式のことをトムライ、オトムライといていたが、今日では、「葬式」、あるいは「葬儀」と呼ぶ場合が多くなっている。

一方で、最近は「家族葬」（身内葬）、「直葬」、「密葬」などという新しい葬儀の形態がみられる。直葬とは、親族が死亡した際、寺や葬儀ホールで葬儀や告別式を営まず、火葬だけで死者送ることを称しているが、「家族葬」ともいわれている。この直葬は、2000年以降、都市部で急増し、東京で15～20%、全国平均で5%であると推定されている。また、樹木葬⁽¹⁰⁾といって墓標の代わりに桜の苗木などを植える埋葬なども2005年から行なわれているという。

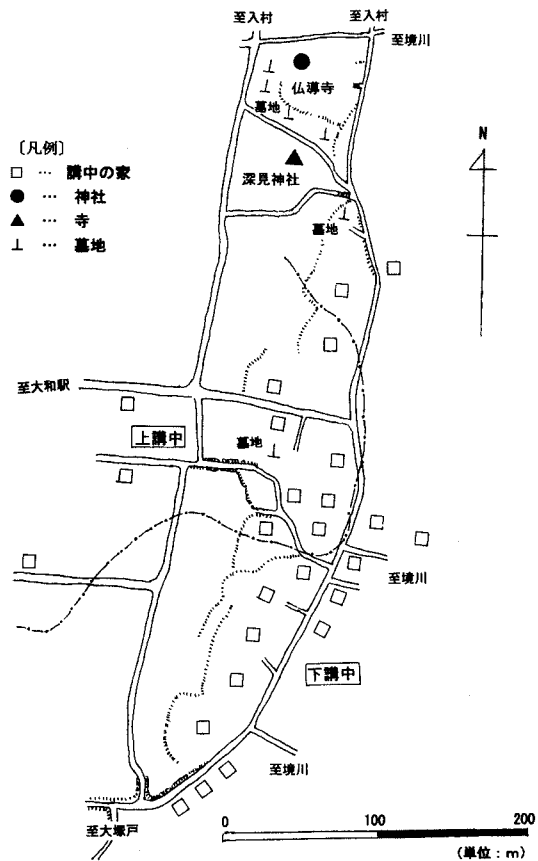
いずれにしても、日本民俗学では「生」、「病」とともに、かつてはタブー視されていた「死」の問題がクローズアップされ、葬送儀礼や墓制の研究、とりわけ「変化」に留意した調査研究が隆盛であるといえよう。

2. 昭和30年代における葬送儀礼の実態

ここでは、伝統的な葬式の様相を把握するため、モデルとして設定した神奈川県大和市深見地域の旧宮下集落を調査対象地として、昭和30年代における葬送儀礼（葬送習俗）⁽¹¹⁾について、死から

入棺まで、出棺・野辺送り、供養の3段階に大きく分けて、その具体的な様相を紹介する。さらに、必要に応じて神奈川県域の民俗事例を活用していく。

では、モデルとした大和市深見（宮下）旧集落の概要を述べておこう。深見地域は、『新編相模国風土記稿』によると、江戸時代には深見村といい、戸数120戸で南北に細長い村落を形成していた。集落の東側に境川が流れ、その川沿いには水田が広がり、反対の西側の台地上になっており、畑作地や雑木林である。その台地の麓と水田地帯にはさまれるように、民家が列状に北から南に連なっている。村内は、北から一関（一ノ堰）・島津・坊之窪・入村・宮下・大塚戸という6集落から構成され、氏神社（鎮守）は相模国式内社13座の1社である深見神社（旧・鹿島神社）、寺院には仏導寺（浄土宗）がある。大塚戸という集落は、1942年（昭和17）に厚木飛行場（厚木基地）の建設に伴い、蓼川村（現・綾瀬市）から移転によって新しく



宮下の概念図（昭和30年代）

誕生した。宮下集落は深見神社の下側に位置することから宮下といわれ、昔からの27戸の家々が上講中13戸と下講中14戸に分かれ、各講中が葬式組を形成し、講中内の葬式を取り仕切っていた（『宮下の概念図』を参照）。しかも、この地域には本家・分家とは別にニワバ（ジミョウ⁽¹²⁾）という同族血縁集団が存在しており、このニワバ（ジミョウ）は結婚式や葬式の時だけに登場して、全体を指揮する役割を担っているが、それ以外の場面では日常的なつき合いはみられない。このような構図は、平成時代の今日まで続いている。

現在の深見地域は市街地調整区域であり、周辺地域は市街地化しているが、集落を形成していた当時の原風景を残している。大和市内の南北を小田急線江ノ島線が縦断し、東西に相鉄線（相模鉄道）が横断しており、その両鉄道が交差したところに大和駅があり、その駅から徒歩で10分程度、東に向かうと宮下集落に辿りつく。この集落は、昭和30年代まで専業農家が多かったが、しだいに兼業農家になって現在に至っている。

では、この地域を中心とした、昭和30年代における葬送習俗の実態をみてみよう。

（1）死から納棺まで

死の予兆として、烏鳴きは縁起が悪いといわれた。このことは、よく烏が鳴いたときにホトケ（死者）が出るからだといわれている。しかし、この民俗事象は昭和60年代の調査ではこの地域で記憶している話者も存在したが、平成10年代から20年代にかけての調査では話者の記憶からも完全

に消滅していた。また、梅干しがたくさん腐ると死人が出るといわれる俗信も同様であり、葬送儀礼にまつわる呪術的伝承は消滅の一途を辿っている。

ホトケ（死者）が出ると、神様に忌みがかからないように、ジミョウがすぐに神棚を白紙でふさぐ。隣接する集落である下和田では、この紙は長老に剥がしてもらおうといわれている。死の忌みをシボクといい、厳重に守った。シボクの期間は、四十九日であるが、固い家では、1年間、神社へ参詣しなかったし、祭りにも参加しなかった。また、祭りの際には、家へ客も招待しなかった。ふつう、百か日過ぎれば、忌みがかからないといわれる。また、四十九日の餅を搗いた後は、いつでも餅を搗いてもよかった。また、忌みの状態にあることをシニボク、ヒガカカル、ヒノカカリなどといい、他人が死者の家の火で煮炊きしたものを食べたり、煙草を吸ったりしても、ケガレをかぶると考えられている。

ホトケが出ると、死亡の翌日にサタニアルクと称して、2人1組となったジミョウが親戚の家などへ知らせに歩いた。最初に寺へ知らせる。サタが来た家では、酒などを出してもてなしたが、酒の肴として豆腐を出す家もあった。愛川町ではヒトニイク、川崎市域ではヒキヤク、三浦半島では「ツゲビトにいく」とか「ツゲット」といっている。神奈川県域では、多くの場合、「ヒトニイク」といい、その使者を「ヒト」と呼んでいる。遠隔地の家には自転車に乗って出かけたが、近年は電話で知らせるようになった。最近では、サタニアルクという習俗が神奈川県域でも次第にみられなくなっている。

葬式でのハタラキ（手伝い）は、イイツギ（家継ぎ）で知らせたという。各家からは、男女2人が出て、料理などをつくる手伝いをした。料理は喪家の台所で調理し、魚などのナマ物は使わず、赤飯や豆腐を用意する。料理は、喪家ではつくらず、仕出し料理を出前するように、現在は葬儀屋が手配してくれる。

死に水（末期の水）は子をとる。ホトケの顔には晒し布をかけ、体の上には着物を逆さにかける。一番よい部屋で北枕にして寝かせる。魔除けの刃物と称して、包丁か、鋏などを枕元か身体の上に置く。伊勢原市三宮の場合、猫が死者の上に乗ると死者が生き返って踊るから箒をのせるという。

枕飯と枕団子をこしらえて枕元に供える。枕飯は、ホトケが使用していたお茶碗で一杯分だけ炊いた。ご飯は茶碗に山盛りにして、その中央にホトケが使っていた箸一膳を立てる。箸のかわりにシカバナを立てる家もある。枕団子は、蓋付きお碗のオカサ（蓋）で、一杯の玄米を石臼で挽いて粉にして12個作った。団子は藁を燃やして茹でるが、このとき出来た藁灰はツジオサメと称して辻に捨てる。枕団子は、野辺送りのとき、お膳に載せて墓へ持っていき、穴の中に埋めたという。また、枕飯や枕団子はニワに三本の木を組み、鍋を吊して炊くか、ニワの天井から縄を吊し、そこに鍋をぶら下げて、下から藁を燃やして炊く。このように日常の炊事に使う火とは別火にする。このときに使った縄、灰、杓子は寺に納めた。

ユカン（湯灌）はユアミともいわれ、昔は奥間の畳をあげ、裏返しにした筵の上に盥を置き、その中に遺体（ホトケ）を入れて、オトコシ（男衆）裸に近い姿になって湯灌をおこなった。湯灌の前にオンナシ（女衆）がみんなで一針ずつでもキヨカタビラ（経帷子）を縫うが、縫う人数が多ければ多いほどよいといわれた。布は刃物を使わず手で裂き、麻糸で結び玉を作らずに縫った。湯灌の水は、水の中に湯を入れた逆さ水を使い、この水は人目のつかない場所に捨てた。湯灌は、ジミョ

ウが中心となって、最初に酒を飲み廻してから、一本箸で豆腐を食べてからはじめ、最後に塩で手を洗って終わった。妊婦は、湯灌のとき、手伝わないが、小田原市千代では妊婦が鏡を懐に入れるという伝承があった。

湯灌が終わるとホトケに、死に装束をさせてから、納棺をおこなう。ホトケに死装束として経帷子を着せて頭には三角布をつけ、旅支度の恰好にするため、手甲脚絆、草履を履かせる。首には、六文銭を入れた頭陀袋をかけた。桑の杖を持たせるとあの世でも長生きするという。あるいは、竹の杖の持ち手部分に半紙を巻いて持たせる家もある。

棺桶は、寝棺であるが、昔は座棺であった。棺桶の材料は、杉でもよいが松が一番である。また、龍頭、天蓋、小天蓋、銅托を叩く藁棒、左縄のツツカケ草履（藁草履）、幡4本、位牌（白木）などは講中の仲間が作る。天蓋・龍頭などは裂いた女竹でつくる。藁草履に使う藁は、木槌で打たないで、そのままで縛った藁を用いた。草履は6足で、その内訳は、コシを担ぐ者が4足、お膳持が1足、位牌持ちが1足である。これらの装具は、葬儀屋から借りる場合もあるが、コシは寺から借りた。山北町箒沢では、「死ねば6文、キワラの草履」といって六文銭と草履を棺の中に入れ、ホトケの別れに酒一杯と汁かけ飯を用意する。だから、汁かけ飯はふだんの日には食べない。中井町では、座棺のとき、人が死ぬと、死者が柔らかいうちに膝を折り曲げ、藁で膝を結わえて納棺しやすくしたという習俗が見られる。

昔は棺桶を講中の人が杉材を用いてつくったという。棺桶には、ザカン（座棺）とネカン（寝棺）があるが、福田では昭和30年頃から寝棺になった。大磯町生沢の場合は、棺は腐りやすい樅の木を使って作り、座棺から寝棺になったのは昭和初年頃であった。

穴掘りはタイヤクといわれ、講中から2人ずつ出る。当番は不祝儀を出したり、妻が妊娠したりしていると、穴掘り当番の役からはずれる。穴掘りのことは、カバン（下番）といわれ、廻り当番制である。仕事の途中で喪家から酒や豆腐などの「穴掘り酒」が届けられる。当番は、ホトケを出した家が用意したスコップ、トングワ、箕などの「穴掘り道具」を使って、6尺ほどの深さの穴を掘る〈写真1、

写真1 穴掘り1（旧津久井町鳥屋）

写真2 穴掘り2（旧津久井町鳥屋）

写真2参照)。この写真は旧津久井町鳥屋(現・相模原市緑区)のものだが、昭和40年頃の穴掘り作業の様子がうかがえる。穴掘りの作業が終わると本膳の正座に着席し、引物は2人分を貰う。穴掘りの当番帳は、城山町(現・相模原市緑区)では、メドバン帳といわれ、当番には4人が当たったが火葬になると2人ずつになった。

通夜は、戦前、身内とクミアイの人だけが残し、線香を絶やさないものだといわれ、夜を徹して営まれた。ホトケが80歳以上のときは、オオバナシ(賑やかな話)でもして一杯飲むという。藤沢市江の島では、ヨセガネを合図に念仏講中がホトケの家に集まり、オヒョウゴ(掛軸)をかけ念仏をおこなう。近年は、告別式に出るより、通夜に訪れるのが一般的になってきている。通夜は、ヨトギとか、オトキと称している地域がある。

なお、葬式をトモライという。トモライは死亡してから3日目くらいにおこなわれる。葬式のこととは、一般的にオトムライ、ジャンボ、ジャンボンなどと称されている地域もある。葬式は、友引を避け、寅の日は嫌われる。このことは、「寅が(千里を)行って(千里を)帰る」からだといわれる。

(2) 出棺から野辺送りへ

出棺前に棺の蓋を石で打ちつけるが、そのとき最後の食い別れと称して一膳の汁かけ飯を一本箸で身内の者が食べ合う。出棺は、草履を履いたまま、ジミョウの4人がコシ(棺)を担いで縁側からニワに出るが、このとき、2人で持っているカリモン(仮門)をくぐる。仮門をラショウモン(羅生門)といい、棺が潜ったあとに折って穴に埋める。トラモンという地域もある。親類の者がコシを支える。コシには、ホトケの着物を掛けたが、最後にその着物はカケムク料と称して寺に納めた。また、コシの上には小天蓋を乗せた。

土葬のときは、ニワの真ん中にタチウスを北向きに寝かせておき、その廻りをハタ(幡)が先頭になって、コシを担いだ葬列が左回りで3回廻る。葬列をトモといい、子、兄弟姉妹、仲人、講中の仲間などが立つ。トモに立つ女性の着物は白無垢であった。帯も白であり、葬式の衣装であるとともに婚礼の衣装でもあった。宮久保ではシロを着て、頭には晒を1尺4寸に裁断したものを被った。昭和30年代末まで、女性の喪服は白色であった。

オシノギといって出棺が昼頃になるので、一時しのぎの腹こしらえのためにオニギリ飯や煮メに酒を添えて、見送りにきた人や手伝いの人に食べてもらう。場所は納屋などにムシロを敷いて坐って食べてもらう。

出棺のとき、送り火を焚く地域がある。久田では、墓地の入口で麦殻を束にして火をつける。宮久保では行列が来ると穴掘りが穴の手前に辻口を立て、そこで麦殻を焚く。出棺が終わると、手伝いの女性たちが座敷にシオバナを振って掃除をしたが、実際は掃く真似をする程度であった。

葬列は、①龍頭を先頭に、②カネ(鉦)、③太鼓、④ハタ(旗)、⑤棺、⑥位牌、⑦写真、⑧膳、⑨家族、⑩親類、⑪一般、という順序である。龍頭はクミアイの人が紙で作ったが、寺から木製の龍頭を借りる地域もあった。ハタ(幡)は宗派によって異なるが3~5本で、寺で作ってもらった。位牌はイセキといわれる相続人が持つ。遺影写真は、子(総領)、そして膳は妻が持った。山北町平山では、位牌は最も身近な者が持つが、施主は家に残っている。

野辺送りをミオクリという。ツジロウ(蠟燭)は六道の辻の印で、墓までの道の角々に1本ずつ

立てたが、3本まとめたものを2組墓地の入口に立てる。墓地で麦藁の松明を燃やしている場所を棺が通るが、これを迎え火とか魔除けとかいっている。僧侶の読経が終わると、遺骸を埋葬し、天蓋、仮門、幡などを墓穴の中に入れてから近親者がヒトコモリ（一握り）ずつ土をかけた後、穴掘りが埋める。埋葬後、僧侶が念仏を唱える。帰りは墓地の入口に草履を脱いで、往きとは違う道を通る。湯河原町鍛冶屋敷では、埋葬するとその上に日除けをおく。また竹の節を抜いて墓にさしこみ、笠をかけておくという儀礼をみることができた。このような野辺送りは昭和30年頃には見られなくなった。

一年に2度目の葬式があったときには、藁人形を作り箱の中に入れ、別の場所に埋葬したという。横浜市旭区善部では、葬列の枕飯は茶碗に盛ってあったものをひっくり返して盛り、その上にシカバネを立てるものだという。

埋葬して墓から帰ると、ナノカ（初七日）の経を唱える。本膳の上座には、穴掘り当番がつく。寺参りには、遠い親戚の者が加わる。ナノカのお膳は、寺参りから戻ると始まり。穴掘りも席につく。終わると、ハチハライといって手伝いの女衆の膳が出るが、男衆が給仕を行なう。最後に、講中の念仏があり、膳が出る。

ミオクリから帰ると、キヨメと称して臼の上に置いてある塩をとり、盥の水で手足を洗って浄める。キヨメの本膳が終わった後、ミオクリとか、オネブツといて、濃い親類が残り、そこに集まった講中が十三仏のオヒョウゴ（掛け軸）をかけて念仏を唱えながら数珠を回す念仏廻しがある。

ハタラキに男女2人が来るような関係を、昔から「二百二升の義理」といった。二百とは、二百文（のちに20から30銭）で、誰でもつき合えるような相互扶助の関係で香典の金額が少なく済ませられることをいっている。米は二升袋に入れ、お金はオヒネリにして袋に結びつけたり、米袋の上にのせたりして、葬式の当日に持参した。昭和初年の生活改善活動で香典や引物をとやめた地域もある。宮下講中では、ヒャクジコウといて講中の中で義理のない家は金を少しずつ出し合って持っていく慣行もあった。また、嫁の実家、子、濃い親戚などからは、赤飯の入ったハンダイ（飯台）1対（1駄あるいは1荷ともいう）が届けられる。不祝儀の場合、ムシモノといい、これを荒縄で縛った。なお、祝儀の場合は麻縄で縛るという。ふつう、赤飯を持ってくる家は一軒だけにし、あとの家は生米か、赤飯料と称して現金で持ってくるが、その際、半紙に「赤飯一駄 何某」と書いて座敷に張り出したという。宮下講中ではハンダイは、膳腕や柳樽とともに講中で所有しているが、特定の家で所有している場合もある。

たとえば、厚木市・海老名市・伊勢原市・秦野市・大磯町あたりではハンダイではなく、ダイカイという割りものの容器で、その外側が黒の漆塗り、内部が朱塗りである。この中に赤飯を入れていく。現在では、贈られた赤飯が食べられなくなったという理由で、蒸し物代と称して現金を包むことが多くなっている。

(3) 死者供養

この地域では、香典返しをヒキモノ（引物）という。不祝儀の引物は、かつては餅饅頭であったが、大正時代頃から羊羹や蒸し饅頭になり、近年は酒、茶、その他の品物になっている。餅饅頭の頃は、家で餅を搗き、その餅で菓子職人に饅頭をつくってもらったという。羊羹や蒸し饅頭の頃は、

厚木市や町田市の菓子屋に頼み、その折詰を荷車で取りに行った。引物をもらった家では、白木の位牌にコヨリを綴じつけて仏壇の中に入れて供養した。この習俗も、昭和60年代には見ることができなくなっている。

ホトケ（死者）が着用したよい着物はコシ（輿）にかけて墓まで持っていく、その後、寺へ納めた。また、ホトケの着物を軒下などで北向きに干し、7日間柄杓で朝晩に水をかけたが、これをミズカケという。家によっては、三十五日から四十九日の間、行なったという。

墓（墓地）には、ウチバカ（内墓）とかテラバカ（寺墓）といわれる個人墓と共同墓地があり、その多くが内墓である。ウチバカ（内墓）がほとんどあり、墓地の場所に、屋敷内や畑の中で、山の縁、水あり、風の少なく、日当たりのよい土地が選ばれた〈写真3参照〉。墓にいる先祖は、子孫をいつも見守ってくれているという。墓地には木を植えるものではないといわれるが、シブ木（香の木）は植えるものだという。

子やオモトといわれる実家、施主の兄弟姉妹などは、新盆にカケ袋を持ってくる。カケ袋は、晒しの四角い袋で、中には小麦2升（米1升）を入れ、草履と扇子をつける。近年は、現金になっている。盆の期間、新しいホトケを出した家では、新仏が迷わないために3年間は縁先に岐阜提灯をさげておくが、この提灯は3年間で過ぎると川に流したという。また、毎年、お盆の十五日か十六日の朝、「先祖のオボンサマが買い物にいらっしゃる」といって、弁当として茶飯の握り飯を仏壇に供える。この日、形見分けや位牌分けをする。下鶴間では、位牌分けと称して紙位牌をつくってもらい、血縁関係がある家に遺品として配った。旧家では、先祖代々の紙位牌が貼られている白木の位牌を仏壇の奥に納めてある。

年忌は、1, 3, 7, 13, 17, 23, 33年で、最後の年忌は三十三年忌で、トドメとかオサメといわれる。年忌ごとに塔婆を供えて供養しているが、トドメには、杉の枝付き塔婆を立てた〈写真4参照〉が、その後、杉の枝を塔婆の先端につけるようになった。平成初期までは墓地で見ることができたが、最近は見られなくなっている。この写真は、前述の鳥屋地区で昭和40年頃の杉の枝付き塔婆である。



写真3 上和田の墓地

写真4 杉塔婆（旧津久井町鳥屋）

以上が、大和市深見において自宅で執行された昭和30年代の葬式のモノグラフである。この当時は、講中（葬式組）が機能しており、血縁や地縁集団が協力し合って自宅で葬式が行なわれており、当時はまだ土葬も行われていた。しかし、大和市域では昭和初期に相模鉄道と小田急江ノ島線の開通後、急速に都市化が始まり、マチ社会も形成されていったが、一方でこの深見地区のようにいくつかの地域では伝統的なムラ社会も昭和30代頃まで存続していた。そして、この頃を境にして葬送習俗をはじめとした民俗儀礼の消滅が始まり、次第にムラ社会の崩壊も始まったといっても過言ではないだろう。

（4）残存している断片的な葬送習俗

葬送儀礼にみられるような「変化」の様相は、各地域によって異なっている。ここでは、各地で見られた葬送習俗の一部を取り上げてみる。隣接地域の藤沢市では、ホトケが出るとすぐ茶碗一杯の米を石臼で粉にする。このとき、2人は向かい合い左回しに挽き、6個の団子をつくる。1合の米を小さい鍋に入れ、外かまどと称して土間または屋外に3本の木を交叉したサギツチョを立ててそこへ吊して炊く。また、自分と同年の人の死を耳にしたときは、塩ナメルといって清めの塩をなめ、災いが自分の身に及ばぬように願った。

また、藤沢市西俣野では塩を紙にくるんだものを2つつくり、耳にあて、そのあと川に捨てたという。⁽¹³⁾この習俗は、いわゆるミミフタギ（耳塞ぎ）とか、ミミダンゴといわれる同齡感覚の習俗であるが、他の地域ではほとんど見られなくなっている。

海老名市大谷では、お盆のとき人が死ぬと頭に播鉢を被せて埋めたという。この習俗は藤沢市遠藤などでもみられた。川崎市宮前区土橋や麻生区黒川では、盆前の死者には播鉢を被せても埋葬する。お盆さまが向うから来る日に、こっちから死人が行くとお盆さまに叩かれるからだという。縄文期の遺跡でも埋葬されたい遺骨（死者）の頭近くに鉢型土器が出土する事例がみられるが、これらとの関係が気になるところである。

神奈川県では33回忌あるいは50回忌を迎えるとトイキリとかトリオサメと称して、杉の丸木を削り、寺で戒名を書いた塔婆を墓に供える。真言宗の場合、杉の木に枝のついた塔婆を墓に立てた。年忌が明けると、ご先祖になるとか、ホトケサマ（仏様）になるといわれる伝承がある。

神奈川県には百か日の供養としてこの日あるいは百一日目に伊勢原市大山の茶湯寺へ参詣するが、参る途中で亡くなった人と似た人に会うといわれる「茶湯寺参り」の習俗がある。平塚市大野地区では、百か日に茶湯寺に参詣し、寝釈迦の仏像と血脈（お札）を貰い、これを墓地に埋めたり、位牌の裏に貼り付けたりしておく。また、参詣の帰りに茶を求め隣家に配る。伊勢原市・相模原市・座間市・平塚市などでは、百か日に大山の茶湯寺に参詣すると、途中でホトケと生き写しの人に会えるという。この習俗は、平塚市、大磯町、伊勢原市など、相模川流域沿いで相模大山が眺望できる地域で顕著にみられる⁽¹⁴⁾。しかし、大和地域では「茶湯寺参り」の習俗はみることができないが、大和市民の中には参詣する信者が存在している。なお、百か日に墓直しを行なう地域が多かった。

さらに、山北町では三十五日または四十九日にイチコを呼んで死んだ人のクチを訊く。これをミサキヨケという。昭和時代初期頃まで、神奈川県では各地にイチコとか、イチッコといわれる民間呪術宗教者が活動していたらしく、シニクチ（死に口）やイキクチ（生き口）を寄せたり、ホト

ケさんを寄せたりしていた。四十九日が過ぎるとクチヨセ（口寄せ）といって、ホトケさまを出して貰う。死者の命日を告げると蠟燭をあげて祈ると、やがてイチコに憑依して死者の声で語る。また、病気に罹ったときなども診て貰ったという。

このように藤沢市域や海老名市域でみられた習俗は大和市域ではみられなかったが、おそらく大和市域ではすでに昭和30年以前に消滅してしまったのか、あるいは、はじめからなかった習俗であったかもしれない。このような葬送習俗は他地域にも見られるので、もう少し見てみよう。たとえば、津久井郡藤野町牧野（現・相模原市緑区）ではヨビカエシといって、人が亡くなったとき、蓑を逆さに着た人が屋根に上がって、その人の名前を呼ぶ習俗がある。このタマヨバイ（魂呼び）といわれる習俗は、大和市域では見られない。

一方で、葬式組は葬式に使うカンオケ（官）や龍頭などの道具（葬具）などを作って用意していたが、葬具屋（葬儀屋）から棺など一部の葬具を購入したり、借用したりするようになった。

つぎに、生活改善諸活動は葬式の変化にどのような影響を及ぼしたのだろうか。大和市域では確認できていないので、ここでは、海老名市望地に所蔵されていた「海老名村生活改善会規約」（望地自治会所蔵、1923年（大正12年9月1日）⁽¹⁵⁾）を取り上げてみよう。その規約には、次のようなことが記されている。

葬礼ニ関スル事

- 一、葬礼又ハ告別式ハ多数参列スルヲ良トスルモ茶菓子ニ止メ他ノ飲食物ハ供与セザルコト
- 一、香料ハ通貨ニ限ルコトトシ近親者以外ハ弔意ヲ表スル足ル程度ノ額ニ止ムルコト
- 一、霊前ニ生花、造花、放鳥等ノ供物ヲ廃止スルコト
- 一、葬家ニ於テ酒ヲ使用セサルコト但シ湯灌酒及ビ鉢洗酒ハ少量ナレバ此ノ限りニアラズ
- 一、供養献立ハナルベク簡単ニナシ引菓子ヲ廃シ且ツ止メ得ザルモノノ外葬家ニ於テ飲食ヲ為サザルコト
- 一、香典返シ等ノ陋習ハ断然廃止スルコト
- 一、冠婚葬祭等ニ於テ節約シ得タル金額ハ其幾分ヲ公共事業ニ寄付シ其残余ヲ貯蓄スルモノトス

これによると、告別式の参加者の接待は茶菓子程度に止め、おそらく酒を供与しないこと、香料すなわち香典は現金で弔意程度の金額にすること、生花などの供物を廃止すること、葬家では酒を出さないこと、ただし湯灌や鉢洗いのときの酒は少量にすること、料理は簡単にし、引物は廃止すること、香典返しは断然廃止のこと、冠婚葬祭は節約し、儉約分は公共事業や貯蓄にまわすことなどが決められている。ここに記されている内容は、おそらく、この当時まで日常的に行われていた慣習であったことを示唆している。いずれにしても、強制的な行政指導は民俗社会には浸透しなかったようである。

ところで、昭和30年代における民俗調査は、ほとんどが「民俗調査項目」⁽¹⁶⁾というマニュアルを参考にして行なわれており、「変化」という視点が多くの場合は等閑視されていた。しかも、これまでの葬送儀礼の調査はどちらかといえば、調査項目をもとに葬送習俗の民俗事象を羅列的に記述したものが多く、かならずしも一軒の家の葬式を対象とした民俗事象を具体的に記述した詳細なモ

ノグラフの作成が行なわれていない場合が多かった。

3. 平成20年代における葬送儀礼の実態

平成20年代になると、「葬式」の形態は昭和30年代と比較すると大きく変化していることがわかる。以前は、龍頭・天蓋・棺などの葬具をクミ（講中）の人たちが作っていたが、昭和30年代中頃から、次第に葬儀屋（葬儀社）から官以外の葬具は借用するようになってきたが、それでもまだ葬式組は機能していた。平成10年代から20年代にかけて、葬式組の存在は稀薄となり、次第に小さな葬儀屋から葬祭場（ホール）を有した大きな葬儀業者（葬儀社）へと移り、葬儀社（葬祭業者）によって葬式じたいが仕切られるような様相が顕著になってきた。

つまり、昭和60年代頃まではまだ伝統的な葬式も残存しており、葬儀屋が介在する「葬儀」が混在している「葬式」が行なわれていた。しかし、平成20年代になるともはや葬儀屋に代わって葬儀社の進出は顕著であり、葬式そのものが商品化してきた傾向が見えてきた。すなわち、葬式のマニュアル化が始まり、画一化された葬式が浸透してきている。このことは、葬式の様式に地域差がみられなくなったり、さらに葬式にかかる諸費用により、費用の金額差（経済差）が新しく生じてきた。こうした現象は、都市社会だけではなく、伝統的な地域社会でも見られるようになってきているのが特徴である。

ここで、紹介する葬式は伝統的な講中（葬式組）に代わって、葬儀社が中心となって行なう葬式の様相を紹介する。ここでは、とりあえず葬儀社、すなわち「葬祭ディレクター」という資格を有した職員が関与する葬式を「葬儀」としてとらえておきたい。

この調査にあたっては、都市の葬送習俗に言及した千葉徳爾の論考を手がかりにした。千葉は、都市を村落の対立概念としてとらえ、「都市の空間的特質を反映する民俗事象として、ここでは村落における原型として近隣社会の関与が最も強いと思われる葬送習俗をとりあげ、都市内部ではその関与がどの程度に原型において存在していたものを変えているかを見ようと試みた。いうまでもなく単にある現象が欠けてゆき、ある形態が変容するというに止まらず、それをそうさせる主体としての近隣社会そのものの変質、目的意識の変化に注意してゆかなければならない」[千葉, 1988, p.318]と指摘している。さらに、新たに葬儀社（互助会）の関与を意識した調査項目15を設定して、調査を実施している。結論として、「近隣の人々が家事の手伝いをする習慣は、積極的か消極的かの違いがあるにせよ、村落でも都市でも無報酬の義務という感覚で行われ、都市化現象は認められない」[同, pp.328]とし、さらに、「流動性の大きい、勤め人の多い川名町三丁目などの場合には、アパート、下宿人の中には近隣にほとんど没交渉であるため、勤務先の同僚や同業者関係のみ会葬して労力提供もそちらから受けるという形態があらわれている。いわゆるベッドタウンや住宅団地における葬送習俗では、このような方向に進むものが現れる可能性があるであろう」[同, p.329]、と指摘している点は興味深い。

調査地域である大和市域は村落（ムラ）から都市（マチ）へ変貌している。ここで平成20年代における葬儀の様相を紹介する。

葬式ではなく、「葬儀」としたのは、いわゆる葬式が葬儀社によって執り行われているからである。調査地においても、茅葺き屋根の家屋は完全に消え、現代住宅の式の家屋に変わり、しかも「田の

字」型の間取りも消滅した。このことは、葬式や結婚式のような人寄せが可能な広い部屋が使えなくなったので、葬式は家以外の会場、町内会館などの公共施設やホールなどを借りて葬儀を行なうようになってきた。しかも、相互扶助組織である講中（葬式組）はいわゆる兼業農家やサラリーマンの家が多くなり、伝統的な組織が維持できなくなり、組織じたいが形骸化してしまったことも葬式（葬儀）を変化させる要因となっている。したがって、平成20年代における葬式の実態は、平成10年代の調査結果を取り入れながら、葬儀社による葬儀の実態をみてみよう。

(1) 死亡の告知

最近では、病気に罹ったり、身体が衰弱したりすると病院へ入院する機会が多くなってきているので、必然的に病院で亡くなる機会が多くなっている。自宅で亡くなることは在宅死といわれ、『現代用語の基礎知識2008』によると、1952年（昭和27）には82.5%、2005年（平成17）には12.2%となっている。平成10年代では病院で亡くなる人が多かったが、葬式は自宅で行なわれるだけではなく、葬祭場（ホール）を利用して行なう事例が見られるようになってきた。

病院で亡くなると、看護師が割箸の先端部分に脱脂綿にくくりつけたもので茶碗の水に浸してから口を湿らせるが、これが末期の水（死に水）である。さらに看護師がアルコールに浸したガーゼなどで体を拭いてくれる場合もある。このような「死後の処置」はエンゼルケアといわれ、看護師などの医療機関の関係者が携わっている。

病院（医師）では、「死亡通知書」をもらい、市役所は24時間受け付けているので、7日以内に窓口へ提出して、「火葬許可証」を交付してもらう。この手続きは、葬儀社が代行してくれる。処理された遺体は、病室から霊安室へ移される。家族は、病院から葬儀社へ連絡するケースが多くなっている。その一方で、檀家寺、親戚などの関係者へ電話で連絡するが、今でもジミョウがその役割を担っている。町内では、町内会の掲示板で知らせるが、近所の人が手伝う慣習はなくなってきている。

ホトケ（遺体）は、葬儀社が手配したライトバン車で病院から自宅へ搬送される。あるいは、病院から自宅ではなく、直接、葬儀社の葬祭場へ搬送する場合もある。ここから、遺族は葬儀屋と深く関わってくる。葬儀社との打ち合わせは、葬儀の進行、手続きの代行、寺の手配、祭壇、通夜・告別式の日取り、香典返しなどについて打ち合わせをするが、伝統的な地域社会である深見地域では、「世話役」としてジミョウが先頭に立って指揮するケースが多い。伝統的な地域社会の出身者を旧住民とし、新しく移住してきた者を新住民としてとらえると、平成20年代では葬式を差配するのは前者がジミョウであり、ジミョウがいない後者は会社関係者があたっている。

(2) 遺体の安置と納棺

病院からホトケサンを自宅に搬送した場合は、座敷（畳部屋）へ運んで、北枕にして安置する。家によっては、玄関からで入るのではなく、庭先の縁側が入る。魔除けや猫避けなどと称して刃物を布団の上に置いておく。このとき、家族とともに駆けつけた親戚や友人などと、死に水といって割箸の先に脱脂綿を巻きつけたもので水をあたえる。葬儀の場所は、葬祭場（斎場）、自治会館、集会所などが利用され、家（自宅）以外の場所で行なわれるケースが多くなっている。大和市域の旧

家では、自宅以外で葬式を行うとジミョウや親戚縁者から批判されるという。やはり、伝統的な地域社会の家ではまだまだ葬式を自宅以外で行なうことに対して強い抵抗感が根底にあるようだが、葬祭場などを使用するが多い。

とくに、最近は湯灌を病院で済ませて来ることが多くなっているが、家や葬祭場で行なう場合も「清拭」といってアルコールなどで身体を拭いている。また、死化粧といって、髪の毛を整えたり、ホトケの両手、両足の爪を切ったり、髭を剃ったりするが、女性の場合は、薄化粧が施される。この仕事は、葬祭ディレクターによって行なわれている。

枕元には、枕飯、線香一本、蠟燭などを供える。家によっては枕団子を作る家もある。葬儀社が上新粉を用意してくれるので、団子をつくる。家族は、通夜といって、線香と蠟燭の火は絶やさないようにする。こうした行為は、すでに平成10年代頃にもみられる。

僧侶の読経が終わると納棺といってホトケサンを寝棺の中に納める。その前に、ホトケサンに死に装束として経帷子、数珠、手甲、脚絆、三角頭巾、頭陀袋、六文銭、足袋、草履などを身に着けさせる。また、生前に愛用していた衣服や眼鏡、煙草などを一緒に納める。六文銭は、五円玉で6個用意したり、紙に六文銭が書いたりしたものが使われた。夏であると、ドライアイスが棺の中に入れて遺体の腐食を防いだ。最近は、遺体を葬儀社の冷凍室に安置するが多い。

(3) 通夜・告別式

通夜は、友引の日が避けられる。会場は葬祭場の式場〈写真5参照〉や家の中に準備され、その部屋で行なわれる場合が多くなっている。祭壇は、家で葬式を行なう場合、利用者の要望や家の間取り、天井の高さなどに応じて二段、三段、五段の祭壇が組み立てられる。祭壇には白布や錦欄生地が掛けられる。その祭壇には白木位牌、枕行燈（灯り）、供物があげられる。灯りは、近年蠟燭から蠟燭の形を模した電球になっている。

会場には受付が設けられるが、会社の関係者や親戚の人が務める。香典とともに生花が届けられるが、平成のはじめの頃は、花輪が家や会場の外に飾られたが、みられなくなった。香典は、市販の香典袋の中に現金を入れて持ってくるようになっている。昭和以前は、お金を美濃紙に包んでいたが、昭和前期頃から髪元結に用いた水引を故事に因んで結びかけて使用したといわれている。とくに、香典帳は参加者名簿なので、付き合いの範囲などがわかる重要な資料となるので、多くの家では葬儀が終わると大切に保管されている。

香典返しは、「御会葬御礼品」と称してハンカチ、靴下、お茶、酒などの品が「会葬礼状」とともに通夜や告別式に訪れた会葬者に配られる。通夜だけに出席する参列者が多くなり、告別式に比べると賑やかである。服装も家族も参列者は黒の喪服（洋服）であり、



写真5 葬祭場

通夜も告別式も同じ服装である。以前は葬式に参加する身内の女性は白い着物を身に着けたが、一般の参列者と同じように黒い喪服や礼服の着用がほとんどある。

また、かつては石を用いて棺の蓋に釘を打ちつけたが、最近は叩くとホトケサンが可哀相だからといって蓋を留める習慣はなくなってしまった。この点については、葬儀社によると「最近の棺桶は頑丈に造られているので、蓋が簡単に開かなくなったから」と説明している。遺体は火葬場へ霊柩車で運ばれる。伝統的な宮型霊柩車より、洋型霊柩車の使用がほとんどである。

平成10年頃は火葬化しているので、穴掘り当番は穴掘りを行なわれなくなったので、石屋の手伝いを受けながら墓地への納骨するのが仕事になった。平成20年代では、納骨が完全に石屋の仕事になっている。

(4) 火葬場・初七日

火葬場では「火葬許可証」を提出し、棺を安置した祭壇の前で「納めの式」をおこなう。僧侶が読経後、参列者が焼香する。かまどの中に納められる際、全員が合掌する。控室で参列者や家族は待っている。火葬が済むと、骨が「骨上げ台」にのせられ、運ばれて来る。参列者が骨壺の中へ納めることを「骨上げ」という。骨上げは、2人1組となり、竹の箸を使い、1片の骨を2人で挟んで拾い上げ、骨壺の中へ納める。最後にノドボトケを入れる。骨上げが終わると、骨壺は白木の箱に入れられ、白布で包んで、喪主に渡される。

火葬場から会場へ帰えるコースは、行きと違うコースを通る。塩で清めるが、宗旨によってはおこなわない。初七日の法要になるが、告別式の当日に一緒におこなわれることが多い。また、料理も仕出し屋に頼むことが多くなっている。葬祭場でおこなうと、料理も会場で用意してくれる。「精進落とし」といって、通常の食事をするが、魚料理などが出される。

香典返しは引物といわれ、平成10年代からは葬儀社が用意した酒、茶などの品物に「会葬礼状」というのがぎが付けた。平成20年代になると、「会葬礼状」とお茶、酒、ハンカチ・靴下などの品物を「郷会葬御礼品」として、通夜や告別式に訪れた参列者に配られる。

年忌明けの杉の枝付き塔婆も平成10年代までは見られたが、平成20年代になると見られなくなった。

火葬場は、大和市域の場合、海老名市、綾瀬市、座間市の4市による広域組合方式の火葬場が大和市と座間市の境界の地に建設されている。この火葬場は、多くが新住民によって使用されている。火葬にされた遺骨は骨壺に入れ、桐や樺で作られた骨箱の中に納められる。骨壺は納骨容器であるが、⁽¹⁷⁾『葬送文化論』によると、今でも長野県北部から上越地方にかけては、骨壺は使わないで、白木の箱（納箱）だけを使用している。

前述してきたように、平成20年代の葬式は葬儀社が介在している場合が多く、葬式そのものが葬祭ディレクターの手によって行なわれている。この点からも今や、葬儀社は伝統的地域社会でみられた葬式組に代わって、「葬式」そのものを執り行なっているといえよう。

4. 葬式から葬儀へ何が持続し、何が変化したか

葬送習俗の研究は、井之口章次によると「各地の事例を集め、いわゆる比較研究法によって、そ

それぞれの習俗の持つ意味、以前もっていた意義を探しもとめ、その推移変遷のあとを知ろう」[1977, p.223]ということになる。しかし、本稿は伝統的な地域社会における葬送習俗について昭和30年代の葬式と平成20年代の葬儀をモデルにして、その持続（存続）や変化の様相を動態的に把握することをめざしている。そこで、民俗の持続と変化をとらえる際、波平恵美子が「変貌・変容と持続の問題を考える場合、変化のレベルをどこにとるかによってその民俗は変わったともいえるし、変化していないともいえる」[波平, 2003, p.178]と指摘した点を重要な手掛かりとしたい。

ところで、地域社会の葬式は葬式組、講中、クミなどと称される近隣集団構成員の相互扶助的な社会組織によって支えられてきた。失われた習俗を資料として記述してきた経緯がある。すでに、新谷尚紀は伝統的地域社会における葬送儀礼への関与と作業分担について血縁・地縁・社縁、無縁⁽¹⁸⁾という社会集団の視点から整理している。

葬送儀礼において、伝統的な儀礼と現代における儀礼と比較すると、明らかに差異がみられる。その差異は、都市化などの人口の急増や農業社会から工業社会への変貌など、いわゆる社会変化に伴いもたらされたといっても過言ではないであろう。まず、生業形態の変化、たとえば農業社会からサラリーマン社会へ変わったこと、ついで、自動車社会になったこと、さらに、葬儀社産業が隆盛になったことなどによって、葬式（葬送儀礼）は大きく変わってきたといえよう。このように外的要因が葬式の変化、あるいは葬送儀礼の変化について、影響を与えているが、このような点は直江広治によって早い時期から指摘されている⁽¹⁹⁾。また、明治時代における当時の葬式については、すでに平出鏗二郎が著した『東京風俗志』⁽²⁰⁾の中にも紹介されている。それによると、忌中の札をはり、これに出棺の期日、葬場などもしるす、枕団子を供え、その傍に刀をおく、湯灌は夜になってから、血族の男が行ない、女は湯を灌ぐのみ、経帷子は血族の婦女2人で縫う、明治の初めは駕籠、やがて輿、昔の棺屋は発達して葬儀社となる寅の日・友引の日を忌む、飯は1碗に止め、箸も1本にて汁をかけて早食いする、平生には一膳飯を忌み、盛りたての飯に汁をかけて食べることを忌む、親族にかぎり、鳥追い笠を被る、下駄を憚り、福草履を床で履く、などと葬式の実態が記述されている。また、葬具の挿絵が掲載されており、神葬式と仏葬式の輿が載っている。いずれにしても、当時の葬式がうかがうことができるので、そこから現在の葬式と比較することによって、変化を見ることが可能である。

では、昭和30年代の葬式と平成20年代における葬式の比較を通して、何が「変化」し、「持続」し、「消滅」しているのか、個々の民俗事象から具体的に見てみよう。この場合、前述したように「変化のレベルをどこにとるか」という波平の指摘に留意しておく。

(1) 変化する葬送儀礼

- ①埋葬法が土葬から火葬に完全に变化したことである。昭和30年代から昭和40年代頃にかけて次第に変わりはじめ、大和市域では昭和60年代になると土葬は消滅したことがわかった。
- ②葬儀を実施する場所は、自宅から次第に集会所（公民館）、そして葬祭場に移行している。このことは昭和60年代に入ると自宅で葬式を行なうことが減少してきたことからもうかがえる。一方、葬祭場で行なうようになってからは、「密葬」・「家族葬」、「直葬」といわれる葬式も行なわれるようになってきている。

-
- ③平成20年代になると、死亡する場所は畳の上といわれた自宅（在宅死）から病院に変化している。平均寿命も高くなり長生きする機会も多くなってきているので、最後は病院で看取られる場合も多くなっている。また、家の構造も変わり、大きな部屋がなくなってきたことも要因として考えられる。
- ④葬儀の主体者も講中（葬式組）から、葬儀屋へと、そして葬儀場（ホール）を所有して葬儀社（葬祭業者）に移行している。
- ⑤死亡通知の方法は、徒歩や自転車で知らせていたが電話で済ませるようになった。葬儀社が代行する場合が多くなっている。
- ⑥弔問客（参列者）は、会社などの職場関係者が中心になっている。このことは、農村社会（ムラ社会）からサラリーマン社会（マチ社会）へと移行したこととも深く関わり合っている。
- ⑦ホトケの近親者（女性）は白の喪服を着なくなり、女性も男性も黒い喪服や礼服で参列すようになっている。
- ⑧火葬によって遺骨は、個人所有の内墓・屋敷墓から、公共の共同墓地・霊園（霊苑）に埋葬されるようになった。あるいは、檀家は、菩提寺の境内にある寺墓に埋葬される。
- ⑨引物に饅頭がほとんどなくなった。饅頭は、葬式饅頭といわれ、古くは自宅で作っていたが、すでに昭和30年代頃から菓子店に注文するようになった。
- ⑩ハンダイ（飯台）に赤飯を入れて届けることが完全に見られなくなった。ハンダイの中に赤飯の代わりに米や現金を入れた時期もあったが、近年はハンダイも使われていない。
- ⑪最近では、告別式より通夜（通夜式）に出席するようになっている。このことは、参列者の生業が変わり、土曜・日曜日以外は仕事が休めなくなっているため、日中の告別式ではなく通夜に多くが出席するようになっている。また男女の服装も黒の礼服を着用しており、普段着姿で駆けつける人は見られなくなった。

以上、変化した様相を見てきたが、とくに大きな変化といえば、土葬から火葬に変化したことなどである。また、いまだに枕団子など、伝統的な行事食をこしらえている家がみられる一方で、農村部、町場（都市部）に関係なく、葬式は多くの家が自宅では行なうのではなく、葬祭場で葬儀を行なうようになっている。

(2) 持続する葬送儀礼

つぎに、平成20年代に入っても持続している葬送習俗について見てみよう。

- ①葬式という名称が、葬儀という名称に変化しても、脈々と葬式そのものの基本的形態は持続（存続）している。
- ②香典はイロダイといわれていたが、米・赤飯という物納から現金と変化しているが、香典というシステムは持続している。
- ③伝統的な社会における手伝いの慣習は長く続いてきたが、その慣行は葬儀社が代行する形で持続している。すなわち、死者の家族は決して葬儀の仕事などに関与しない。
- ④初七日・三十五日・四十九日の法要の習俗は略式化しているが持続している。
- ⑤死に対する忌の観念が稀薄化しているが、年賀はがきの辞退などという慣行で持続している。忌の観念をみることができる。
-

-
- ⑥遺体の取り扱い方で、北枕・魔除けの刃物の慣習が守られている。
 - ⑦死装束のスタイルが守られている。葬儀社で用意し、着替えも行なう。
 - ⑧湯灌に変わって清拭に持続しているが、実行者は身内（家族）から看護師や葬儀社の職員になっている。

以上のことを見ると、葬式にみられる個別の習俗に焦点をあてると意外と持続していることがわかる。

(3) 消滅した葬送儀礼

最後に消滅した習俗について見てみよう。

- ①魂呼び・烏鳴き・耳塞ぎ餅などの呪術的習俗がほとんど消滅した。
- ②経帷子は葬儀社が用意するようになったので、女衆が縫わなくなった。
- ③湯灌の習俗が消滅した。しかし、「清式」といって、アルコール液で看護師や送り人によって行なわれるようになった。
- ④野辺送りという葬列が見みられなくなったが、霊柩車は葬祭場から火葬場との往復にあたって同じ道を通らない。
- ⑤土葬という埋葬が完全に消滅した。
- ⑥平成10年頃までは年忌明けに杉の枝がついた塔婆を供えていたが、今では塔婆に杉の葉をつけている家まで見られなくなった。
- ⑦火葬になってから穴掘り作業がなくなっても、穴掘り当番の役割は残っていたが、現在では完全に穴掘り当番の役は消滅している。

ただし、興味深いことは消滅した習俗は、俗信として認識され、持続していることである。たとえば、逆さ水、一膳飯、箸をご飯の上に立てないなどといって、いわゆる俗信として見るができる。

結語—まとめにかえて

本稿では、葬送儀礼（習俗）の変化と持続そして消滅に関してまとめたが、生成についてはふれていない。ここでは、葬送儀礼の変化と持続についてもう少し考えてみよう。まず、葬送儀礼の変化を考える場合、ムラ（伝統的地域社会）とマチ（都市的社会）との関連に注意してきたが、十分にマチ社会については言及できなかったのが、今後の課題としたい。

従来の民俗学では、伝統的な地域社会、すなわち農村社会を対象にして葬送習俗の調査研究を実施してきた経緯がある。しかし、昭和30年代から始まった社会変化によって、ムラ社会からマチ社会へ移行していく過程で、伝統的地域社会の変貌を眼にしている。

一方で、葬儀社の進出は宗教（宗派）や地域の慣習（民俗）の違いを超えて、葬式のマニュアル化がもたらされている。すなわち、都市化や核家族化の進行に伴い、近隣社会の協力する慣習が失われていく過程で、葬儀社は葬式全般に関する必要な知識、かつては地域社会で共有していた葬送儀礼の民俗知識をマニュアル化して、通夜や葬儀に携わる会葬者へわかるようなイラスト入りの解説書を配付している。⁽²¹⁾

葬送習俗の年表—大和市域を中心に—

年 代	大和市域の葬送習俗	市外（神奈川県）の葬送習俗	社 会
慶応 3 年	1867		・ 朝廷, 仏事祭式を廃止
明治初期		・ この頃, 寒川町宮山では神葬祭になった	
明治 5 年	1872		・ 公営墓地「青山墓地」
明治 6 年	1873		・ 火葬禁止
明治 8 年	1875		・ 火葬解禁
明治 13 年	1880	・ 綾瀬市「小園村共用焼場取設願」	
明治 15 年	1882		・ 東京にコレラが発生
明治 17 年	1884		・ 「墓地及埋葬取締規則」
明治 19 年	1886	・ 「福田のコレラ」といってコレラが流行する ・ 下鶴間村に火葬場開設	・ 東京葬儀社創立
明治 22 年	1889		・ 鶴見村, 渋谷村（現・大和市）が誕生
明治 23 年	1890	・ 「大和村火葬場」になり, 簡単な火葬炉を建設	
明治 25 年	1892		・ 関東を中心に天然痘が流行
明治 28 年	1895		・ コレラが大流行
明治 40 年	1907	・ 「早桶柩 7 枚・中サシ 2 本 1 円 30 銭」という購入記録がある	・ この頃, 寒川町一之宮に医院ができる
明治 41 年	1908	・ この時期の葬式で, 公田では三日, 七日に親類やクミアイを呼んで法事をしている	
明治 45 年	1912		・ 明治天皇大葬
明治末		・ この頃から, 上和田・下和田では棺を作らなくなった	・ この頃, 江ノ島では土地が狭いので火葬になる
大正 10 年	1921	・ この頃, 上和田では出棺前に食い別れといって膳の汁かけ飯を箸一本で食べた	・ 霊柩自動車の使用が始まる
大正 12 年	1922		・ 「多磨墓地」
大正 15 年	1926	・ 下和田講中の穴掘「順番規約」ができる	
大正末期		・ この頃まで, 葬式の時, 近親者の女性は白い喪服を着ていた。 ・ 鶴間ではトムライのサタは徒歩であった。また, 葬具はすべて手作りであった	
昭和 2 年	1927		・ 大正天皇大葬
昭和初年		・ この頃, 藤沢市長後（旧・渋谷村）に葬儀社ができる	
昭和 5 ～ 6 年	1930 ～ 1931	・ 寺で祭壇を安く貸し出した	
昭和 8 年	1933		・ 『旅と伝説』（誕生と葬礼特集）
昭和 12 年	1937		・ 柳田國男『葬送習俗語彙』
昭和初期		・ この頃まで, 下鶴間では座棺であった。 ・ この頃, 深見では, 生活改善を機会に香典や引出物をやまところもあった。また, トリオサメに杉の葉付き塔婆を立てる家があった。 ・ この頃から鶴間ではトムライのサタに自転車を使った。 ・ この頃, 下鶴間では葬式道具は町田の葬具屋で揃えるようになった。 ・ この頃, 今の大和中央通りに葬具屋ができた	
昭和 10 年頃	1935 頃		・ この頃まで, 寒川町では死者の身内は白い着物を着た
昭和 16 年	1941		・ 太平洋戦争が始まる
昭和 17 年	1942	・ 福田の「穴掘り順番」の帳面	
昭和 10 年代	1935 ～ 1944	・ この頃から, 高等町の葬具屋の棺を利用し始めた	・ この頃, 寒川町では棺が桶から座棺にかわる
第二次世界大戦前		・ この頃まで, 鶴間では墓地から帰ると赤飯とケンチン汁の膳であった。このころ上和田・下和田では, クミアイの香奠は 10 ～ 20 銭が普通であった	

年 代	大和市域の葬送習俗	市外（神奈川県）の葬送習俗	社 会
昭和 22 年	1947	・下鶴間地区で野辺送りが行われた	
昭和 23 年	1948		・「墓地、埋葬等に関する法律」
昭和 26 年	1951	・大和町・渋谷村・綾瀬町の三町共同施設として火葬場が発足	
昭和 29 年	1954		・井之口章次『仏教以前』
昭和 20 年代	1945 ～ 1954		・法制的改革
昭和 31 年	1956		・渋谷村の一部が大和町に編入
昭和 34 年	1959		・大和市となる
昭和 35 ～ 36 年	1960 ～ 1961	・この頃まで、寺の祭壇を下和田では使用	
昭和 36 年	1961		・東京都調布市・世田谷区「土葬禁止条例」
昭和 39 年	1964	・上和田では、ハンタイで持参する赤飯の半分は蒸かさないで糯米のままであった。	・東京オリンピックが開催 ・圭室諦成『葬式仏教』
昭和 30 年代	1955 ～ 1964	・この頃まで、上草柳・下草柳では土葬であった。 ・この頃から上和田。下和田では火葬になる ・この頃、深見では火葬になる	・この頃まで、寒川町では人力霊柩車を利用した
昭和 45 年	1965	・綾瀬市吉岡では火葬になる ・この頃、鎌倉市腰越では火葬になる	
昭和 40 年代	1965 ～ 1974	・この頃まで、寺の祭壇を宮久保では使用した	・この頃、寒川町では座棺が使われなくなる。また、土葬から火葬に移り変わる ・この頃、山北町神縄では火葬になる
昭和 52 年	1977	・海老名市・座間市・綾瀬市が大和市営火葬場改築計画に参加	・綾瀬市深谷では火葬になる
平成 53 年	1978		・この頃、藤沢市西俣野では火葬になる
昭和 54 年	1979	・「広域大和斎場組合」（大和市・綾瀬市・海老名市・座間市の 4 市）が設立	・「葬送墓制研究集成」（全 5 巻）
昭和 57 年	1982	・「大和斎場」開業	
昭和 59 年	1984		・映画「お葬式」
昭和 61 年	1986	・葬儀社開設	
昭和 50 年代	1975 ～ 1984	・この頃上和田・下和田では、位牌分けの習俗が廃れてきた。 ・この頃鶴間ではトムライのサタは、電話でおこない、寺には徒歩で行った	・この頃、松田町大寺では火葬になる
平成元年	1989		・「大葬の礼」
平成 3 年	1991	・「友引の日」の通夜に「大和斎場の使用開始をする	・「お礼の会」という社葬
平成 8 年	1996	・葬祭業者の葬祭ホールを開設	
平成 11 年	1999		・国立歴史民俗博物館編『死・葬送・墓制資料集成 東日本編』
平成 12 年	2000		・国立歴史民俗博物館編『死・葬送・墓制資料集成 西日本編』
平成 12 年頃	2000 頃		・「直葬」が都市部を中心に増加
平成 15 年	2003	・葬儀社開設	
平成 20 年	2008		・映画「おくりびと」
平成 25 年	2013	・市内最新の霊園が開設（共同墓地・霊園 7 か所）、葬儀社は 20 社	・NHK 調査で「直葬」は関東地方が多く、5 件に 1 件。

[註]

「葬送習俗の年表—大和市域を中心に—」は、風見明『明治政府の喪服改革』（2008、雄山閣）柳田国男編『明治文化史 13 風俗（新装版）』（1979、原書房）、岩波書店編集部編『近代日本総合年表』（1978）、歴史学研究会編『日本史年表』（2007、岩波書店）、講談社編『暮らしの年表』（2011）、神奈川県『神奈川県史 民俗編』（1977）、神奈川県立博物館編『県史部の民俗（Ⅰ）—大和・綾瀬地区—』（1973）、大和市『大和市史 3 通史編近現代』（2002）・『大和市史 8（下）別編民俗』（1996）、大和市教育委員会編『上和田・下和田の民俗』（1981）・『深見・上草柳・下草柳の民俗』（1982）・『下鶴間・福田の民俗』（1983）などを参考に作成。

これによると、その内容は、1. 死亡をつげられたら、2. 通夜・ご葬儀の準備、3. 告別式からご葬儀後まで、4. あいさつと手紙の文例、5. 会葬・弔問のマナーからなっている。とくに、「ご臨終からご葬儀までの流れ」では、仏式・神式・キリスト教（カトリック・プロテスタント）毎に紹介している。仏式の場合、ご臨終直後（末期の水、湯灌・死化粧）、死亡の連絡、通夜の準備（日時・場所、喪主・世話人、祭壇、料理）、納棺（死装束、枕飾り、納棺）、ご葬儀の準備、ご葬儀・告別式（葬儀、出棺）、火葬（納めの式、骨上げ）遺骨迎え（初七日、精進落とし）、ご葬儀終了後（香典返し、形見分け）、忌明け法要（四十九日、納骨・埋葬）となっている。このことは、葬送儀礼の変化に拍車をかける要因のひとつになったことは歪めないことである。

すなわち、今日の葬送儀礼は明治時代以降からはじまったといえよう。変化に影響を及ぼした要因を考える場合、おおよそ大別して外的要因と内的要因に分けられる。これらの要因が混交複合していることを前提として考慮しておかなければならない。

外的要因としては、昭和20年代は法制的改革、昭和30年代は技術革新、高度経済成長、昭和40年代は情報化、高齢化、国際化などによって、それらの影響が認められる。内的要因としては、葬式組など互助生活などの伝統的な社会組織の衰退化、核家族化などによる家族制度、広間型の間取りの家屋などの変化があげられる。さらに、土葬から火葬への変化が加速化してきたことにあることに間違いのないであろう。火葬の受容年代は、神奈川県内で見ても、「葬送習俗の年表—大和市域を中心に—」からもわかるように、江ノ島では明治以降、大磯町大磯は昭和10年代、松田町は昭和30年頃、山北町谷峨は昭和35年頃、大和市深見は昭和30年代、綾瀬市吉岡は昭和45年、同市深谷は昭和52年、藤沢市西俣野は昭和53年頃であり、昭和30年代から50年代にはほとんどの地域で火葬を取り入れて定着化していったことがわかる。⁽²²⁾

現在の葬送儀礼は明らかに葬式組から葬儀社へ移行してきたことが、葬式を葬儀社が主導するになってきた。そこで、葬儀社のメニューに沿って同じような内容で行なわれるようになり、どの地域でもどんな家でも違いのない葬式になってきている。しかも、違いが見られるのは、葬式に対する経済的負担の部分と、葬式の形態が増加し、選択の可能性が広がった。とくに、家族葬、直葬などという新しい形態が都市部だけでなく、いわゆる地方にも普及したことである。

ところで、宗教学者の石井研士は葬式の変化と現状に関してはつぎのように指摘している。「祖先崇拜や死に関する儀礼の変容に関しては、すでに昭和50年代から多くの研究者が注目し、十分な研究の蓄積がある。先に示したように、もともと葬儀は近親者や隣人、村人たちによってすべてが整えられ進行されていった儀礼であった。棺も手製であり、当然ながら通夜や葬儀の際の料理も自らが作ったものであった。そこには業者が介在する余地は存在しなかった。日本に葬儀社が現れたのは明治20年代といわれる。装具の貸出や葬列の人出を手伝うものであった。昭和初期になると派手な葬列が廃れ、告別式中心の葬儀となる。葬儀社の営業の中心は、祭壇や霊柩車へ移っていく。現在のように、葬儀の運営の実質的な主体が親族や町会から葬儀社へと移行したのは1960年代になってからのようだ。葬儀業者が死の儀礼の一切を司るようになって、儀礼は死者を取り巻く人々に提供され、そして消費されるようになっていった。葬祭業者は多様な商品を取りそろえ、カタログの儀礼を示す」〔石井、2005、p.193-4〕としている。また、葬送儀礼が自宅ではなく、会館（葬祭場）で行なわれるようになった理由については福澤昭司の論考を紹介している。⁽²³⁾

今回の調査結果からわかったことは、大局的な見地からみれば、石井が指摘したことと同様の見解となっている。このことは、石井の場合は都市部の葬送儀礼を中心に分析しているのだから、作成した「葬送習俗の年表－大和市域を中心に－」からもうかがえるようにならずしも大和市域とは同じ時系列ではとらえられないだろう。

さらに、個々の事象に留意した詳細な調査からもわかるように、葬儀社が葬式に介入することによって、葬式のマニュアル化、画一化、商品化の様相を呈してきたといえよう。この辺の状況は、他地域との比較研究が必要である。

今後の課題として、火葬場・病院の霊安室・葬祭場などの実態、墓、位牌に関する習俗などについて詳細な調査を実施すること、生活改善活動の視点から十分な分析することなど、多くの課題が残っている。そこで、これらの課題を進めるために、今後も追跡調査および観察調査を続けていきたい。

註

(1)——たとえば、①葬送儀礼や墓制に関する研究書には、井之口章次『日本の葬式』（早川書房、1965）、佐藤米司『葬送儀礼の民俗』（岩崎美術社、1971）、『葬送墓制研究集成（全5巻）』（名著出版、1974）、第1巻葬法、第2巻葬送儀礼、第3巻先祖供養、第4巻墓の習俗、第5巻墓の歴史、芳賀登『葬儀の歴史＜増補版＞』（雄山閣出版、1990）、五来重『葬と供養』（東方出版、1992）など、②現代社会と葬儀の変化に視点を置いた新谷尚紀『生と死の民俗史』（木耳社、1996）、新谷尚紀編『死後の環境－他界への準備と墓－』（昭和堂、1999）、新谷尚紀『お葬式－死と慰霊の日本人－』（吉川弘文館、2009）など、③葬祭業者や利用者に視点をあてた新しい角度から葬送を論及した山田慎也『現代日本の死と葬儀－葬祭業の展開と死生観の変容－』（東京大学出版会、2007）など、④火葬導入後の葬送儀礼の変化などに留意した前田俊一郎『墓制の民俗学－死者儀礼の近代－』（岩田書院、2010）、林英一『近代火葬の民俗学』（法蔵館、2010）など、⑤文化人類学・宗教学・社会学からは、近藤功行・小松和彦編著『死の儀法－在宅死に見る葬の礼節・死生観－』（ミネルヴァ書房、2008）、森謙二『墓と葬送の現在－祖先祭祀から葬送の自由へ－』（東京堂出版、2000）、藤井正雄『現代人の死生観と葬儀』（岩田書院、2010年）、内藤理恵子『現代日本の葬送文化』（岩田書院、2013）、植村久子『お墓の社会学』（見洋書房、2013）など、⑥『死・葬送・墓制資料集成』の研究成果をまとめた国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在－民俗の変容－』（吉川弘文館、2002）、⑦葬送習俗の沿革を明らかに資料の集積を目的とした柳田國男『葬送習俗語彙（復刻

版）』（国書刊行会、1975）など、枚挙にいとまがない。
(2)——加藤隆志「民俗学における『変化』」（相模原市教育委員会編『研究報告』第4集、1995、21-33頁）。氏は、「民俗の変化」論として、桜田勝徳、宮田登、田中宣一、井之口章次、倉石忠彦の論考を取り上げ、整理している。
(3)——柳田國男主宰の「郷土生活研究所」によって、昭和9年5月から同12年4月に至る3ヶ年にわたって山村の民俗調査が実施された。この調査は、「採集手帖」の質問項目を手がかりに進められた。本編は、基本的には同一の山村において同一の調査項目で再調査を昭和59年度から61年度までの3ヶ年間にわたって実施し、昭和10年から昭和61年に至る50年間の変化とその変化との把握をめざした研究成果である。それは、成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』（1990）としてまとめられている。
(4)——社会学者であり、当時、成城大学民俗学研究所所長であった森岡清美は、成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』の「はしがき」の中で指摘している。
(5)——鈴木岩弓「東日本大震災の土葬選択にみる死者観念」（『今を生きる－東日本大震災から明日へ！復興と再生への提言－ 1. 人間として』（東北大学出版会、2012）や佐藤敏悦「拒絶された土葬－東日本大震災の現場から－」（『東北民俗』第46輯、2012）などを参照。
(6)——調査結果は、東日本編2冊と西日本編の計4冊の報告書にまとめられて国立歴史民俗博物館から刊行されている。その4冊は、『死・葬送・墓制資料集成 東日本編1』（1999）・『死・葬送・墓制資料集成 東日本編2』

(1999),『死・葬送・墓制資料集成 西日本編2』(2000)・『死・葬送・墓制資料集成 西日本編2』(2000)である。

(7)——国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』(吉川弘文館, 2002)。本書は、第一部 葬儀と墓の変容「奄美・沖縄の葬送文化」(赤嶺政信),「樹木葬とニソの杜」(金田久璋),「東北地方の葬送儀礼」(武田正),「葬儀社の進出と葬儀の変容」(福澤昭司),「大型公営斎場の登場と地域の変容」(米田実),「清めの作法」(太郎部裕子),「葬儀と食物」(板橋春夫),「葬送儀礼の変容」(関沢まゆみ),第二部 討論 葬儀と墓の行方「フォーラムを終えて」(新谷尚紀)という構成からなっている。

(8)——この三者分類(血縁の関係者・地縁の関係者・無縁の関係者)は新谷尚紀[1991]によって提起されたものであるが、関沢はこの分類を踏まえている。

(9)——井上章一『霊柩車の誕生』(朝日新聞社, 1984)。本書は、『霊柩車の誕生(増補新版)』(朝日文庫, 2013)として再版している。この中で、宮型霊柩車の発展過程に関する3段階の図式を、人間が運ぶ輿 → トラックが運ぶ輿 → 宮型霊柩車, という発展経緯を考えている。

(10)——『現代用語の基礎知識』(2008, p.1135-45)。ユーザーが直葬を選ぶ理由は、経済的事情(お金がない), 宗教観の変化(特に信仰がない), 人間関係の希薄化(参列者がいない)などである。藤井正雄監修『現代葬送用語の基礎知識』(四季社, 2011)

(11)——葬送習俗は、民俗調査以外にも、神奈川県『神奈川県史 民俗編』(1977), 和田 正洲『神奈川県の葬送・墓制』(『関東の葬制・墓制』, 明玄書房, 1979), 大和市『大和市史 民俗編』(1996), 藤沢市『藤沢市史 民俗編』(1980), 寒川町『寒川町史 民俗編』(1991), 海老名市『海老名市史 民俗編』(1993), 大和市教育委員会編『上和田・下和田の民俗』(1981)・『深見・上草柳・下草柳の民俗』(1982)・1983, 『下鶴間・福田の民俗』(1983)などの自治体史の民俗編や民俗調査報告書に記述されている事例も参考にした。

(12)——和田正洲[1961]につきのように説明している。大和市深見の宮下・入村・島津には、ニワバという同族的な集団があり、ジミョウとか地親類と同じであるともいわれている。神奈川県域には同族的な集団と地縁的な集団の2類型がみられる。このニワバは、本家分家関係とは別で、同族的な集団で一族の姓を冠して「何某ニワバ」と呼んでいる。現在ではニワバという語彙ではなく、ジミョウといわれている。大和市域ではこのジミョウが、結婚式と葬式の場面に登場する。

(13)——筆者調査, および藤沢市『藤沢市史 民俗編』(1980, p.721-56)を参照。

(14)——筆者調査, および神奈川県立博物館編『神奈川県民俗分布地図』(1984, p.52)を参照。

(15)——筆者調査, および海老名市『海老名市史 民俗編』(1993, p.365-402)を参照。

(16)——井之口章次『仏教以前』(古今書院, 1955)。この書には、「葬送習俗調査要項」が掲載されており、この項目からも伝統的な葬式をうかがいしることができる。しかも、昭和30年代の葬送習俗の民俗調査はこの「葬送習俗調査要項」に依拠している、また、本書には葬送儀礼や靈魂観に関する論考が収められている。その後、1965年に早川書房から『日本の葬式』と題して、1977年に筑摩書房から「筑摩叢書」の1冊として、さらに2002年「ちくま学芸文庫」として刊行しているが、「葬送習俗調査要項」が除外されている。

(17)——葬送文化研究会編『葬送文化論』(古今書院, 1993), 岩手日報社出版部編『岩手の伝説(改訂版)』(岩手日報社, 1992), 八王子市婦人センター歴史同好会編『八王子のお葬式—聞いて歩いたお弔い—』(八王子市教育委員会, 1987)などがある。

(18)——新谷尚紀『日本人の葬儀』(紀伊国屋書店, 1992, p.30)。表1「産育と葬送の儀礼の対応」を参照。

(19)——直江広治「葬式」(柳田国男編『明治文化史13 風俗(新装版)』, 原書房, 1979)を参照。死穢観念の衰退, 葬式組が葬儀に関する一切の仕事をする土地が多いが町方では葬儀社の出現, 火葬の普及などで、葬式が変化していることを指摘。)死の穢れを忌む習俗が衰弱していった理由としては、喪家の火を恐れなくなったこと、通夜で喪家の食物を共食するようになったこと、喪屋の制が衰微したこと、などをあげている。

(20)——平出鏗二郎『東京風俗史(下)』(ちくま学芸文庫, 2000, p.101-112)。初出は1901年で、一冊本として刊行されている。

(21)——くらしの友で発行している『ご葬儀に関する手順と心得 便利帳』(2002年版)による。こうしたマニュアル本は各葬儀社で出しているが、内容に違いはあまり見られない。

(22)——たとえば、火葬時期をめぐる研究には、福澤昭司による「土葬から火葬へ—火葬する時期をめぐる—」(『信濃』52-11, 2000)の論考がある。

(23)——福澤昭司「葬儀社の進出と葬儀の変容」(国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』, 吉川弘文館, 2002)は、長野県松本市内に1989年(平

成元), 葬祭場(会館)を備えた葬儀社が開業してから, 葬儀社が開業したことによって地滑り的な変化を遂げた葬儀への関与の仕方に変化がみられ, やがていくつものことを詳細に報告している。

引用・参考文献

- 石井 研士, 2005, 『日本人の一年と一生—変わりゆく日本人の心性—』, 春秋社
- 板橋 春夫, 1995, 『葬式と赤飯』, 煥乎堂
- 井上 章一, 1984, 『霊柩車の誕生』, 朝日新聞社(増補新版: 2013, 朝日新聞社)
- 井之口章次, 1997, 『日本の葬式』, 筑摩書房
- 岩本 通弥, 2003, 「総論 方法としての記憶」(岩本通弥編『現代民俗誌の地平3 記憶』, 朝倉書店)
- 植村 久子, 2013, 『お墓の社会学』, 晃洋書房
- 大本 憲夫, 1990, 「山村の社会組織の変化と再編」(成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』, 名著出版)
- 小田嶋政子, 1997, 「生活改善運動と婚姻・葬送儀礼の変化—北海道伊達市の事例から—」(『日本民俗学』第210号, 日本民俗学会)
- 国立歴史民俗博物館編, 1999, 『死・葬送・墓制資料集成 東日本編1』
- 国立歴史民俗博物館編, 1999, 『死・葬送・墓制資料集成 東日本編2』
- 国立歴史民俗博物館編, 2000, 『死・葬送・墓制資料集成 西日本編1』
- 国立歴史民俗博物館編, 2000, 『死・葬送・墓制資料集成 西日本編2』
- 国立歴史民俗博物館編, 2002, 『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』, 吉川弘文館
- 小松 清, 1990, 「先祖観・来世観の変化と持続」(成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』, 名著出版)
- 埼玉県入間東部地区教育委員会連絡協議会編, 1985, 『埼玉県入間東部地区の民俗—都市化地域における民俗の変貌—』, 大井町・三芳町・上福岡市・富士見市
- 新谷 尚紀, 1991, 『両墓制と他界観』, 吉川弘文館
- 新谷 尚紀, 1992, 『日本人の葬儀』, 紀伊国屋書店
- 新谷 尚紀, 1996, 『生と死の民俗史』, 木耳社
- 新谷尚紀編, 1999, 『死後の環境—他界への準備と墓—』, 昭和堂
- 成城大学民俗学研究所編, 1990, 『昭和期山村の民俗変化』, 名著出版
- 関沢まゆみ, 2002, 「葬送儀礼の変化—その意味するもの—」(国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』, 吉川弘文館)
- 田中 宣一, 1990a, 「“民俗変化”と追跡調査」(成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』, 名著出版)
- 田中 宣一, 1990b, 「生活改善諸活動と民俗の変化」(成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』, 名著出版)
- 千葉 徳爾, 1988(1971), 「都市内部の葬送習俗」, 『民俗学と風土論(千葉徳爾著作選集③)』東京堂出版(初出: 1971, 『人類科学』第23集)
- 内藤理恵子, 2013, 『現代日本の葬送文化』, 岩田書院
- 直江 広治, 1979, 「葬式」(柳田国男編『明治文化史 13 風俗(新装版)』, 原書房)
- 波平恵美子, 2003, 「死と葬送」(新谷尚紀・波平恵美子・湯川洋司編『暮らしの中の民俗学3—一生—』, 吉川弘文館)
- 林 英一, 2010, 『近代火葬の民俗学』, 法蔵館
- 福澤 昭司, 2002, 「葬儀社の進出と葬儀の変容」(国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在—民俗の変容—』, 吉川弘文館)
- 前田俊一郎, 2010, 『墓制の民俗学—死者儀礼の近代—』, 岩田書院
- 森 謙二, 2000, 『墓と葬送の現在—祖先祭祀から葬送の自由へ—』, 東京堂出版
- 柳田 國男, 1929(1963), 「葬制の沿革について」, 『定本柳田國男集』第15巻, 筑摩書房
- 柳田国男編, 1979, 『明治文化史 13 風俗(新装版)』, 原書房(初出: 1954, 朝日新聞社)
- 山田 慎也, 2007, 『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容—』, 東京大学出版会
- 和田 正洲, 1961, 「ニワバ」(『日本民俗学会報』第19号, 日本民俗学会)

(実践女子大学文学部非常勤講師, 国立歴史民俗博物館研究協力者)

(2013年12月21日受付, 2014年5月26日審査終了)